



Title	yetについての一考察 : yet, already, still, any more, と「まだ」と「もう」
Author(s)	吉村, あき子
Citation	Osaka Literary Review. 1989, 28, p. 16-29
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25546">https://doi.org/10.18910/25546</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# yetについての一考察

—— yet, already, still, any more, と「まだ」と「もう」——

吉 村 あき子

## 0. 序

yet という語は、しばしば already と対応させて論じられる。

- (1) a. He has gone already.
- b. He hasn't gone yet.
- c. Has he gone yet?

(1) に見られるように、相補的な環境に、同じような意味で、用いられるからである。ところが、yet の現れる現象を調べてみると事はそう単純ではなさそうである。さらに、(2a, b) に示されるように、英語の already と yet は、日本語の「まだ」と「もう」に 1 対 1 対応しない。

- (2) a. Have you already seen him? (もう彼に会いましたか)
- b. Have you seen him yet? (もう彼に会いましたか)

本論では、否定の環境によく現れると言われる yet に焦点をあて、その意味と機能を考察したい。まず第 1 節では、これまで成されている研究を概観し、already と yet が補充セットを成すという Traugott & Waterhouse (1969) の議論に疑問を投げかけ、その不備を示す。第 2 節では、これらの出現は Grice のいう言語慣習的含意によってでなければ、説明がつかないことを示す。第 3 節では、already, yet に still, any more を考察の対象に加え、日本語の「まだ」と「もう」との関係を調べたい。

## 1. 補充セットとしての分析

Traugott & Waterhouse (以下 T & W) (1969) では、Klima (1964) が some → any, sometimes → ever etc. というセットを考えているのと同じ

く、(3)(4)に見られるように、already と yet は 1 つの補充セット（元は同じで環境に応じて 2 つの表現形を持つもの）を成しているとしている。

- (3) a. He has gone already.
- b. \*He has gone yet.
- (4) a. ?He hasn't gone already.
- b. He hasn't gone yet.

学校文法によると、already は肯定文と「意外、驚き」を表す疑問文で用いられ、他方 yet は否定文と一般疑問文に用いられるとある。即ち (3)(4)(5) のような already と yet の分布が知られている。

- (5) a. Has he gone already?
- b. Has he gone yet?

T & W によれば、「already は Q [= 疑問文標識] と同じレベルの節の構成要素であるならば、yet になる」という。従って上の (5)についていえば、(5a) は He has gone already. という文全体の真偽を問うているのであって、次の (5'a) のような意味構造を立てることができる。

- (5') a. [Q It is the case [he has gone already] ]

—————  
異なるレベル

つまり already を持つ (5a) は「彼がもう行ってしまったというのは、本当か」ということで、Q と already が異なるレベルであるため、この already は yet にならない。これに対して、yet を持つ (5b) は「既済性」(readiness) について問うているのであって、次の (5'b) のような意味構造を立てることができる。

- (5') b. [Q It is already the case [he has gone] ]

—————  
同じレベル

この場合は、Q と already が同じレベルにあるため yet にかわる。次の例も同じようにして説明することができる。

- (6) もう彼が行ってしまった（という）ことを知っていますか。  
 a. Do you know that he has gone already?  
 b. \*Do you know that he has gone yet?

- (6') [Q You know [he has gone already] ]

異なるレベル

Q と already が同じレベルの節内にないから、already は yet に変わらず (6b) は非文となり、(6a) が正しい文となる。

否定文についても同じように扱われ、Q の代わり NEG (=否定文標識) が用いられる。

- (7) a. He doesn't love her already.  
 b. He doesn't love her yet.

(7a) は not と already のどちらが広い作用域をとるかで、二つの解釈が可能になる。

- (7') a. i) [NEG It is the case [he loves her already] ]

（彼が既に彼女を愛しているというのは本当ではない）

- ii) [It is already the case [NEG he loves her] ]

（彼が彼女を愛していないのは既に本当である）

- (7') b. [NEG It is already the case [he loves her] ]

（彼が彼女を愛しているというのはもう本当ではない）

(7'a) ではどちらの読みにしても NEG と already が異なるレベルの節にあるので yet には変わらず already がそのまま現れる。それに対して (7'b)

では NEG と already が同じレベルの節にあるので yet になる。

以上のような分析は、表層には現れない階層的な意味構造を仮定し、Q や NEG の力の及ぼす範囲によって説明しようとしたところは評価できるが、なぜ Q や NEG が already を yet に変えるのかという本質的な問題に答えていないし、次の様な例の説明ができない。

(8) I can see him yet. (Quirk *et al.* 1985)

(9) There's plenty of time yet. (*ibid.*)

already を yet に換える Q も NEG もないのに yet が現れているからである。ここでもっと注意を払わなければならぬのは、already, yet のもつ語自体の意味である。

## 2. 言語慣習的含意による分析

Bolinger (1977) によれば、yet には、問題となっている時点に先だって、ある状況が消えて、それと正反対の状況が生じているという期待が含まれていると言う。例えば、

(10) They aren't here yet. (彼等はまだここに着いていない)

といえばその含意は、彼等がここにいないという状態が、いまはもう、彼等がここにいるという、まさに正反対の状態に変わっていて欲しいという期待が事前にあった、というものである。

(11) He's here yet. (彼はまだここにいる)

といえばその含意は、彼がここにいるという状態が、いまはもう彼がここにいないという、まさに正反対の状態になっていればよいという期待が事前にあった、というものである。

already の場合に期待というのは何かというと、基準となる時点において真である状況が、それより後の時点において、実際に真になっているは

ずだ, ということである。

- (12) He's here already. (彼は既にここに来ている)

これは, この断言が後の時点になって実現するという期待があったのに, それがもう現時点で実現している, というのである。

これを太田(1980)に従うと次の様になる。今その文の一次時制の表す時を  $t_0$  とし,  $t_0$  より前の時  $t_i$  を  $t_i < t_0$  とし,  $t_0$  より後の時  $t_i$  を  $t_i > t_0$  と表し, ある事象を  $S$  で示すと, このことは次のように表示できる。

- (13) a. already

予想:  $\exists t_i > t_0 (t_i(S))$

断定:  $t_0(S)$

- b. yet

予想:  $\exists t_i < t_0 (t_i(S))$

断定:  $t_0(\sim S)$

この様に語自体の意味からみると, 先にあげた(8)(9)の説明ができる。便宜上繰り返す。

- (14) I can see him yet. (まだ彼に会うことができる)

予想:  $S$  (彼に会うことができない) という事態が  $t_0$  (この文では現在) よりも前に既に実現しているだろう

断定:  $\sim S$  (現在彼に会うことができる)

と表す事ができる。彼に会うことができないという事態が現在既に実現しているはずだと予想していたところ, まだ実現していないと断定することなのである。

- (15) There's plenty of time yet. (まだ十分時間がある)

予想:  $t_0$ において時間が十分にない状態になっているだろう

断定: 現在時間が十分にある

というように説明できる。

already と yet を補充セットとする T & W (1969) は, already と yet のほんの一面を扱ったものに過ぎない。この二語はむしろ, それ自体の意味に基づいて肯定とも否定とも結び付くのであって, それはその固有の意味が肯定でも否定でもないからである。この already, yet の固有の意味としたものは, まさに Grice のいう言語慣習的含意である。この慣習的含意によって already と yet の出現は説明されうると言えるだろう。逆に言えば, この慣習的含意によってでなければ, この二語の出現する現象と意味を的確に捕らえられない。肯定文には already, 疑問文, 否定文には yet という単純な図式では到底説明の付かない現象なのである。

### 3. 「まだ」と「もう」との関係

さて, この節では日本語の「まだ」と「もう」との対応関係を考えてみる。

- (16) a. I have finished the work already.  
 (私はもうその仕事を終えました)  
 b. Have you finished the work yet?  
 (貴方はもうその仕事を終えましたか)

(16a)のalreadyを日本語にするとすれば「もう」になるだろうし, (16b)のyetも日本語にするとすれば「もう」になる。また逆に

- (17) まだ時間は十分ある。  
 a. There's plenty of time yet. (Quirk *et al.* 1985)  
 b. There's still plenty of time. (*ibid.*)

(17)に示したように, 「まだ時間は十分ある」に対応する英文は (17a) の yet, (17b) の still を持つ二文が対応する。日本語の「まだ」と「もう」は, 英語の yet と already さらには, still と any more とどのような関係になっているのか考察してみよう。

ここで, 便宜上時制を現在に限定して考えることにする ( $t_0 = \text{現在}$ )。

already と yet は (13) のように表示できた。その表示方法を L. Horn (1970) による still と any more の意味に適用すると、

- (18) a. still

前提:  $\exists t_i < t_o (t_i(S))$

断定:  $t_o(S)$

- b. any more

前提:  $\exists t_i < t_o (t_i(S))$

断定:  $t_o(\sim S)$

となる。(13) と (18) において yet と any more の違いは、前者が予想としていることを後者は前提としているということだけである。

今度は「まだ」と「もう」に注目すると、

- (19) a. We can see him yet. (まだ彼に会うことができる)

- b. We cannot see him yet. (まだ彼に会うことができない)

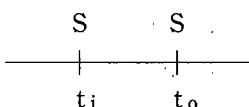
- c. We cannot see him already.

(もう彼に会うことはできない)

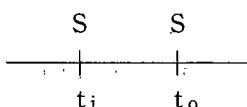
- d. We can see him already. (もう彼に会うことができる)

We can see him. を S とし、時間関係を線で示し、( ) 内は予想、それ以外は t 時における実際の状況とすると、(19) は次の様に表示できる。

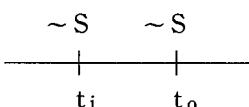
- (20) a.  $(\sim S)$



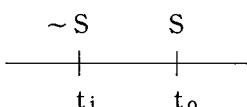
- c.  $(\sim S)$



- b.  $(S)$

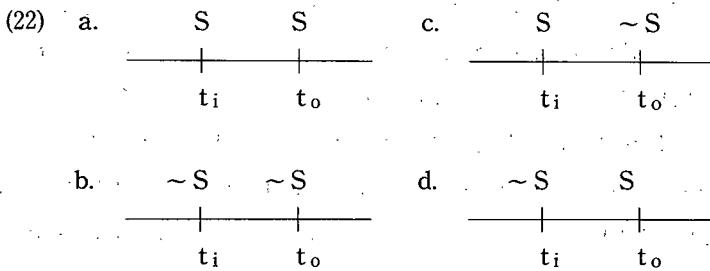


- d.  $(S)$



still と any more についても同じようにしてみると、(21) a～dは(22) a～dと表示できる。

- (21) a. We can still see him. (まだ彼に会うことができる)  
b. We still cannot see him. (まだ彼に会うことができない)  
c. We cannot see him any more.  
(もう彼に会うことができない)  
(方) d. We can see him any more. (もう彼に会うことができる)



(21d) は方言で、(22d) を表す適切な表現が標準英語にはないわけである。この方言では、*still* は前提と断定の極が同一で、*any more* はその極が逆になるというように、*any more* の役割が再編成されているということになるわけなのだが、一応ここに挙げておく。

さて、「まだ」を持つ a, b, c についてみてみよう。(19a) と (21a) を比べてみると、両方とも（まだ彼に会うことができる）という日本語に対応するが、それぞれが持つ含意において異なっている。(20a) と (22a) を見るとそれがよく分かる。yet のある (19a) では (20a) に示されているように  $t_i$  と  $t_o$  における実際の状況はともに S で変化していない。それは still のある (21a) の表示 (22a) に於ても同じである。異なるのは、yet のある (20a) には  $t_i$  において ( $\sim S$ ) という予想があったことである。

(19b) と (21b)についても同じことが言える。両方とも（まだ彼に会うことができない）という日本語に対応するが、yet をもつ (19b) の表示 (20b) は *t<sub>1</sub>*において (S) という予想があったという点においてのみ still をもつ

(21b) の表示 (22b) と異なる。要するにこの四つの文が示していることは、日本語の「まだ」は  $t_i$  と  $t_0$  の状況が変化していなければ、それと反対の「予想」があってもなくても用いられる、ということである。

次に、「もう」を持つ c, d, について見てみよう。(19c) と (21c) を比べてみると、両方とも（もう彼に会うことができない）という日本語に対応するが、それぞれが持つ含意において異なっている。(20c) と (22c) を見るとそれがよく分かる。already のある (19c) では (20c) に示されているように  $t_i$  から  $t_0$  における実際の状況は S から ~S へ変化しており、それは any more のある (21c) の表示 (22c) においても同じである。異なるのは already のある (20c) には  $t_i$  において (~S) という予想があったことである。

(19d) と (21d) についても同じことが言える。両方とも（もう彼に会うことができる）という日本語に対応するが、already を持つ (19d) の表示 (20d) は  $t_i$  において (S) という予想があったという点においてのみ any more を持つ (21d) の表示 (22d) と異なる。要するにこの四つの文が示していることは、日本語の「もう」は  $t_i$  から  $t_0$  へ状況が変化 (S → ~S あるいは ~S → S) していれば、 $t_i$  においてその状況と反対の「予想」あってもなくても用いられる、ということである。

以上のことをまとめると、英語では「予想」を慣習的含意として持つ、yet と already は、それを持たない still と any more と、語彙的に区別されるが、日本語ではそのような含意を持つか持たないかによって語彙的に区別されることはなく、現実の状態が S (~S) → S (~S) であれば「まだ」が、S (~S) → ~S (S) であれば「もう」が用いられるのだと言えるだろう。英語では「予想」の有る無しが言語化されるのである。

肯定文と否定文の比較から導き出されたこれらの結論は、疑問文においてもうまく説明される。疑問文は、断定ではないという点において肯定文、否定文と根本的に異なる。疑問は、疑問に答えることが（論理的に）可能な場合にのみ適切であり、（適切性の必要条件）、話者（疑問を発する人）は、少なくとも聴者（答える人）が自分より問題になっている事柄について

て、良く知っていると思っていること（十分条件）が必要である。また、否定に関連する疑問文特有の現象は、いわゆる「片寄り」(bias) ということで、「片寄り」とは、疑問文が肯定、否定いずれの答えをより多く予想するかということで、それぞれ「肯定の片寄り」(positive bias), 「否定の片寄り」(negative bias) を持つと言われる。肯定疑問文は普通、中立的か否定的な片寄りを持つのに対して、否定疑問文は肯定的片寄りをもつ。片寄りに関してこのような違いが生じるのは次のような理由によるのではないかと思われる。例えば次の例において、

- (23) a. Are you going to Bill's party?  
b. Aren't you going to Bill's party?

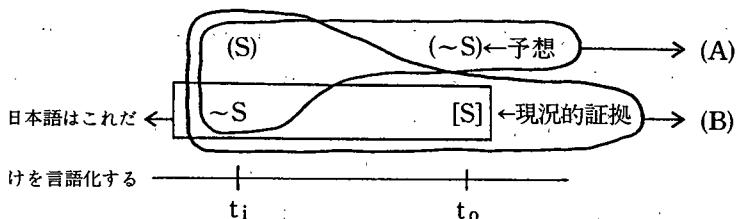
(23a) は You are going to Bill's party という命題が真か否かを問うているわけであるが、この疑問の背後には Maybe you are not (going to Bill's party) という気持ちがある。同様に (23b) の疑問の背後には Maybe you are (going to Bill's party) という気持ちがある。さもなければ疑問を発することはないからである。肯定疑問文の持つ否定的片寄り、否定疑問文の持つ肯定的片寄りは、それぞれ上述の Maybe you are not ないしは、Maybe you are という気持ちに対応したものである。抽象的にいって、否定疑問文を発する動機は「p が真であるという話者の前前からの信念と、 $\sim p$  が真であることを示唆するような現況証拠との間に摩擦があり、話者は  $\sim p$  を疑問視し、意外だと思って否定疑問文を発する」と説明できるし、肯定疑問文を発する動機も同じように「 $\sim p$  が真であるという話者の前前からの信念（この場合は無意識かもしれない）と、p が真であることを示唆するような現況証拠との間に摩擦があり、話者は p を疑問視し、意外だと思って肯定疑問文を発する」と説明される。この心理的な過程は、英語、日本語ともに共通のものではないかと思われる。

さて、ここで説明したいのは先に (2) として挙げた次の例文である。便宜上繰り返す。

- (24) a. Have you already seen him? (もう彼に会ったのですか)  
 (=2) (Quirk *et al.* 1972)  
 b. Have you seen him yet? (もう彼に会いましたか) (*ibid.*)

ここに示した日本語は、Quirk *et al.* (1972) の日本語訳『現代英語文法大学編』（池上嘉彦訳）を採用させてもらった。共に肯定疑問文であるが、(24a) では already が、(24b) では yet が用いられ、対応する日本語はどちらも「もう」である。これはどういうことなのだろうか。Quirk *et al.* (1985) では、疑問文における already と yet の差は、already が肯定の答えを期待するのに対し、yet の答えは否定か肯定のどちらでも可能であるという点である、としているが、これは本質的な回答にはなっていない。(24) の意味は、(25) の様に表されるだろう。

(25)



(A) : You haven't seen him yet.

(B) : You have already seen him.

肯定疑問文：否定（中立）の片寄り

already : 肯定の片寄り

yet : 否定の片寄り

→不一致の場合：対極表現の優位

(24a) は次の様なことを表している。「貴方はいつか彼に会うだろうと思っていたが、現在 ( $t_o$ ) までにはまだ会っていないと思ってた (A)。聞くところによると（現況的証拠）もう会ったとか (B) →『もう彼に会ったんですって？』((B) を信じている)」(A) は予想（信念）、(B) は現況的証拠によって示唆される状況である。先ほどの肯定疑問文の心理過程の説明に従うと、(A) と (B) の間に摩擦があり、話者は (B) を疑問視し、意外だと思って (B)

についての肯定疑問文を発する。これは否定の（中立の）片寄りを持つが対極表現の *already* が肯定の片寄りをもち、このように一致しない場合は対極表現が優先されるため (24a) は肯定疑問文なのだが 肯定の片寄りを持つこと になる。つまり肯定の答えを予想しているということは、話者はどちらかというと (B) を信じている とすることが *already* 一語あるために聴者に伝わるわけである。

それに対して (24b) は「貴方はいつか彼に会うだろうと思っていたが、現在 (t<sub>0</sub>) までには会っていないと思っている (A)。しかし、もう会ったという噂 (現況的証拠) も耳にしたのだが (B) ... → 『もう彼にあったの?』 ((A) を信じている) ということになる。先ほどの肯定疑問文の心理過程の説明に従うと、(A) と (B) の間に摩擦があり、話者は (B) を疑問視し、意外だと思って (B) についての肯定疑問文を発する。これは否定の (中立の) 片寄りを持ち、対極表現の yet も否定の片寄りを持つため (24b) は問題なく 否定の片寄りを持つこと になる。つまり否定の答えを予想しているということは、話者はどちらか というと (A) を信じているということが、yet 一語あるために聽者に伝わるわけである。

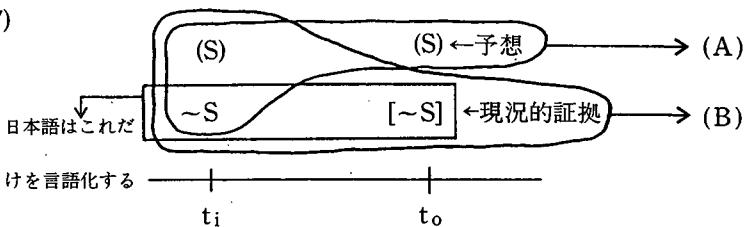
(24a, b)に対応する日本語がどちらも「もう」であるのは、(25)に示されているように、日本語は実際の認識あるいはそれに類するもの（この場合どちらも  $\{t_i \text{ の } \sim S \rightarrow t_o \text{ の } [S]\}$ ）を言語化し、その含意は言語化しないためであると説明できる。日本語は(24a)と(24b)の違いを「まだ」、「もう」で表現できないのである。

最後に否定疑問文を見ておくことにする。次の例において、



(26) は次の様に表示できる。

(27)



(A) : You have already seen him.

(B) : You haven't seen him yet.

否定疑問文：肯定の片寄り

already：肯定の片寄り

yet：否定の片寄り

→不一致の場合：対極表現の優位

(26a) では、「貴方はもう彼にあっているだろうと思っていた (A) のに、聞くところによると (現況的証拠) まだ会っていないとか (B) →『まだ会っていないのですか？（もう会ったんでしょう？）』((A)を信じている)」ということになる。先の否定疑問文の心理過程の説明に従うと、(A) と (B) の間に摩擦があり、話者は (B) を疑問視し、意外だと思って (B) についての疑問文（否定疑問文になる）を発する。これは肯定の片寄りをもち、対極表現の already の肯定の片寄りと一致し (26a) は肯定の片寄りを持つことになる。つまり肯定の答えを予想しているということは、話者はどちらかというと (A) を信じているということを示している。

(26b) でも同様であるが、否定疑問文の肯定の片寄りが yet の否定の片寄りと一致しない。不一致の場合は対極表現のほうが優先されるため、結局 (26b) は否定の片寄りを持つことになる。つまり否定の答えを予想しているということは、話者はどちらかというと (B) を信じているということを示している。

(26a, b) に対応する日本語がどちらも「まだ」であるのは、(27) に示されているように、日本語は実際の認識あるいはそれに類するもの（この場合どちらも  $\{t_i \rightarrow \sim S \rightarrow t_o \rightarrow [-S]\}$ ）を言語化し、その含意は言語化しない

ためであると説明できる。日本語は (26a) と (26b) の違いを「まだ」、「もう」で表現できないのである。

(24) 「もう彼に会ったのですか」と (26) 「まだ彼に会っていないのですか」が、それぞれの a, b の英文の意味において曖昧であるということは、この節の前半で述べたように日本語が「予想」の有る無しの区別をしないということから説明されうるといえるだろう。

#### 4. 結 論

この小論では、yet に焦点を当て、その出現を包括的に扱うには、これら自体の語の意味（慣習的含意）を考えないでは説明がつかないこと、日本語の「まだ」と「もう」が yet と already, さらに still と any more などのような関係になるかということを見た。「のむ」が drink に意味的にきれいに重なるわけではないのと同様、「まだ」、「もう」の already, yet や still, any more とのずれが示せたと思う。

#### 参 考 文 献

- Bolinger, D. (1977) *Meaning and form*. London, Longman.  
Horn, L. (1970) 'Ain't it hard (anymore).' *CLS* 6. 318~27.  
Klima, E. (1964) 'Negation in English,' in J. Fodor and J. Katz (eds.) *The Structure of Language*. Prentice-Hall, Englewood Cliffs.  
太田朗 (1980) 『否定の意味』大修館書店。  
クワーグ. R. 他 (池上嘉彦訳) (1977) 『現代英語文法 大学編』紀伊國屋書店。  
Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.  
Traugott, E. C. and J. Waterhouse (1969) "'Already' and 'Yet': a suppletive set of aspect-markers?" *JL* 5. 2. 287~304.